ためらうよりも、早く。

沙璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ためらうよりも、早く。

【Ｎコード】
Ｎ８８７９Ｚ

【作者名】
沙璃

【あらすじ】
父が社長を務めるアパレル関連企業の重役を担う、２９歳の柚希。美人で聡明と謳われる彼女のストレスの捌け口は、軽めのニコチンと相性の良いセフレとの時間――それがあったから今まで乗り越えられた。…だから、アイツとの過去をいい加減に葬り去りたい。
――それなのに。『結婚』のひと言が、私のライフプランを急転させることになる…？

『結婚』なんてご勘弁。（前書き）

『やっぱりオマエとは幼馴染みの方が合うな』

この一言が未だ心の棘として抜けずにいるなんて、誰にも言えない。この性格で弱音なんて吐かない。――まして対峙した本人に言う訳ないでしょう？

『結婚』なんてご勘弁。

「柚希、いい加減に結婚したらどうだ？」

「無いわね。何でセフレを切る必要があるのよ？選りすぐりの男とヤれなきゃ仕事になんない」

「っ！ゴホゴホ、」

穏やかな朝食時間をぶった切る父親の問い掛けに、憮然とした態度でブラックコーヒーを啜りながら答えたのは私――朝比奈（アサヒナ）　柚希（ユズキ）もうすぐ２９歳。

「のん、はしたないわね」

「はしたないのは柚ちゃんでしょ！？」

先ほどミルクティーを見事に噴き出したのち、ナフキンで口元を拭いながら前方より言い返して来たのが４歳下の妹。朝比奈（アサヒナ）　望（ノゾミ）未、通称のんである。

「はしたないなんて思わないわ。セックスしたくなるのは生理現象だもの、違う？――ほら現に、のんデキたじゃない。うんうん、おめでたーい」

「まあ、――って！」

こういった無茶苦茶な御託を並べ立てながら笑顔をプラスすれば、

そっかあと頷いてくれる。そして自分の失態に気づくのはその後になるのだから、我ながら可愛い妹だと思うわ。

「望未…、まさか尭の子が！？」

「パ、パパ…、はい」

「か、母さん！…大変だー！」

顔面蒼白になった父親が席を立つと、向かう先は間違いなくキッチンでお弁当を作ってくれているママの元。…というか、幼馴染みなうえウチの会社で働いてる尭（アキ）との結婚を猛烈プッシュしてたクセにね。

「ぎゃあああ！柚ちゃんどうしてくれるのよー！」

「良いじゃない。これでシリアス部分は省けたわ――あとは尭がやって来れば完了よ」

――こうして実際に、のんが身ごもればおろおろ動揺するのだから、父の性格に似たのは間違いなく妹の方だろう。

「もうっ！あ、尭くんに電話…」

２０代にして、ぷうと頬を膨らませるとかアリ？とか思うけど、まあ妹だから許しておこうか。おろおろしながらスマホを手にしたのんは、半泣き状態で彼氏の尭にどうにか電話をかけた。

「あ、尭くーん、…バレた――ちっ、違うよ！柚ちゃんだもん！」

まあ尭にとって、朝からその開口一番の威力はダイナマイト級だろうけれど。やっぱりドS男は、それも逆手にとって妹を甚振っているらしい。

天然を通り越えたおバカなところが可愛くて、割と甘やかしてしまったのは不徳の致すところだけれど。私にはまるで無い、素直なところや人に甘えられるところが可愛いのだから良しとする。

それでも“ベタ甘”を許さなかった唯一の男が、のんの相手になるとは思わなかったけどね…。

＊　＊　＊

「結婚しないんですか、柚希さんは」

「…最も縁遠いわ、ソレ」

社内のとある会議室へ呼び出したのは私だというのに。なにゆえ部屋に入った途端、またうんざりするフレーズを聞かねばならない？

誰も見ていないのをいいことに、会議テーブルを椅子にして足まで組んでこの男の到着を待っていた。タイトスカートに合わせたルブタンの新作パンプスを履いたまま、ぶらぶら足をばたつかせる姿こそはしたない。ここでニコチン補給が出来れば文句ナシだったが、あいにく分煙社会はこの企業も例外ではないから仕方ないし。

小さくひとつ息を落として立ち上がれば、今度はやって来た男が同じ体勢をするではないか。

普段は頭の痛くなる会話しかしないテーブル上に堂々と腰掛け、長い足を組む男の姿を誰が“鬼の中嶋チーフ”と信じるだろう？

「今日は日帰りで？」

「そうよ。向こうの支店の支社長と一度、会えって父がうるさくて――で、ムリヤリ予定組んだのよ」

あと1時間後には空港へ向かわなきゃいけない私も立っているのが億劫で、彼との間を少し取って再び腰を落ち着けた。ちなみに福岡支店とその近隣の店舗の視察を兼ねて、数名の担当者と博多まで行く。…明日の昼には会議あるから、今夜の便でとんぼ返りになるけど国内外の往来は日常茶飯事。

「さすが社長。柚希さんのこと知り尽くしてる」

「本当、悔しいけど」

くくっと小さく笑う男の傍らで溜め息を吐き出せば、彼の発言に肯定した自分がやけに悔しさを増した。

――それは仕事（ことさら利潤）に関することには、ＮＯと言えないという性質であるため。

「忠頼さん、本気で結婚させたがってるけど。良いんですか？」

「あら、そんなの知らないわよ。私は独身レディであり続けるし――のんと尭がくっついてくれたから、朝比奈家は安泰だもの。そうでしょ？“近しい未来”の義弟くん？」

朝比奈　忠頼（タダヨリ）といえば口うるさい父であり、イコールこの会社を仕

切る社長。そのため社長令嬢だから重役の立場で胡坐をかいている、と入社後も暫く相当な言われようだった。
それは鬼と呼ばれる、昔馴染みの尭にしたって然り。何をしてみたって並大抵の努力では手に入らないし、やって当たり前の評価が用意されているだけ。そこで如何に我慢を重ね、小さなことにもがむしゃらに取り組めるかで変わってくる。周囲がようやく落ち着くまでには数年掛かったけれど、それは他人には体験できない貴重な経験となったと思う。
誰も知らない、誰にも気遣わないで良い――これにホッと安堵するのも、同族企業の柵（しがらみ）を知っている者同士ゆえだろう。…まあ、可愛い妹とは違ってどちらもドウデモイイ小言でブレることはゼロだけどね。

「それはそうでも。柚希さんは大丈夫ですか？」

「なによ尭。アナタ、パパのご機嫌取りまで企んでるの？」

「そんなことに手間を掛けるほど、無能じゃありませんよ」

「あら、言うようになったわね」

「そうですか？――まあ柚希さんの結婚話がすり替わって、朝一番に説教をくらっても平気なくらいは」

朝のひと悶着によって見事に2人で遅刻したという男。相変わらずオシャレなスーツと小物類を身に纏い、寸分の隙もなくてクールなやつ。…同じ属性の私からすれば、その仮面を取っ払ってやりたくなる。

そのメガネの奥の眼差しには少なからず、種を蒔いた怨念も込められているようにも映るがいつものこと。長年知ってるからそんなのいつも通りスルーだし、いちいち構っている性質なら会社の役員なんて務まらない。

「ふふっ。これでも可愛い妹の一大事だもの、私なりの援護だったのよ」

「まあ、望未が不用意に口を滑らすよりマシ」

「でしょ？律儀に週末に挨拶しに行くとか言うから、のんの動揺は半端なかったわ」

「それも良かったけど。ある意味、面白いし」

「アンタ鬼ね」

「祐史さん甚振ってるらしい柚希さんにそのまま返す」

「…どうして此処で、風船男の名前が出るのかしら？」

のんの慌てふためく姿といえば、それは下手なコメディより愉快なものだと私も思ってしまうが、今はその情景を浮かべる余裕が微塵もない。

「祐史さんから、連絡待ってるって“俺の方”へ電話が来たんですよ。柚希さんとヤってから、明らかに避けられてるって」

「…あら、風船男の勘違いじゃない？」

“祐史”の名前が出た途端、眉根が寄ってしまったことは気づかれているだろう。それでも気丈に振る舞いつつ、僅かに震った声音には自身も素知らぬフリで言葉を返した。
すると占拠していたデスクから降りて立ち上がった尭が、顔に笑みを貼りつけて平静を装っている私の肩をポンポンと叩いた。

「…なによ尭」

「それは直接言って下さい。あの人には俺、借りが幾つもあるから無碍には出来ないし。それに“アノ祐史さん”が俺を介すなんて、相当焦ってる証拠だと思いますよ？」

――昔馴染みの可愛げのナイ年下が言うようになったな、と静かに去る後ろ姿を見ながら苦笑してしまう。それだけ全員、歳を取っていることに気づくと今度は自嘲するばかりだった。

＊　＊　＊

「結婚を前提に付き合いませんか？」

あれから福岡支店へ視察メンバーや秘書とともにやって来るまでは、通常どおりに滞りなく事が運んでいた。
車内も機内も休む暇なく、打ち合わせと電話での対応処理に追われていたがこれも日常。
女友達から仕事漬けだと言われようが、大好きなアパレル業界に携われているのだから何の不満もない。それにストレスはエッチの相

性が良くて上手い男がいれば、私としてはもう日々オールＯＫなのだ。

「あら、到着早々ジョークで歓迎？――すこぶる面倒ね」

「それは奇遇だ、俺もジョークは面倒」

しかし、対峙する目の前の男のニヤリと笑う整った顔に、福岡支店の応接室で遭遇してしまった瞬間。食事を忘れるくらい夢中になれる仕事モードも、有名アパレル企業の重役としての顔もまた、いともあっさりぶった切られるとは悔しさが舌打ちへと繋がった。

そして福岡支店の社屋エントランス前まで出迎えてくれた支社長。“重役にお客様が”と、どことなく焦りの色を見せたのは、この男が理由だったのだと合点がいく。
さらにルブタンのパンプスのハイヒール具合が、こんな時に限って足元をフラつかせる原因になるとは情けないものだ。

それは当然だろう、世界にも名の通ずる東条グループの有能部長――私にとっては風船男もとい、１週間以上前にセックスをした昔馴染みの桜井　祐史（サクライユウジ）が目の前に居るのだから。

「なあ柚希、知ってる？」

ギシリと音を立てながら革張りのソファから立ち上がり、未だに入り口付近で立ち尽くす私の元へ歩み寄って来た風船男。

「アンタの風船度合いならね」

「フッ…。それはちょっと厄介だ」

昔からこの微笑で周りの女だけじゃなく、大人さえも上手く丸め込んで来た。ある意味、芸当は素晴らしいと言ったところか。

さらさらの髪とか男のクセに綺麗な肌質をしていることとか。アパレル関係に身を置く尭以上に、お洒落に拘りがあってスーツもクセなく着こなすし、腕時計も品の良い高級品をサラッとつけているとか。

それでいて性格は優しいクセに、怒らせると私以上に性質の悪いところとか。何より女関係はムダがなくて、風船みたいに軽く次の地を求めて飛んでいくから風船男って命名してあげたとか。…誰かにもし聞かれれば、この男について何でも答えられるから、昔馴染みって本当に面倒だと思うわ。

腕を取られてビクリとしかけたものの、必死で堪えた自分に拍手したい。腕から手首、そして手から指先へと移動する男の手捌きは手慣れたもの。きゅっと絡められた指先がくすぐったいけれど、そんな仕草に動揺するほど伊達にセフレが多い訳ではない。

１７０センチと背の高い私でも見上げてしまう男は、今日も昔と変わらない爽やかな香りを纏っているようだ。…私がずっと嫌いになれずにいる、ほろ苦い感情が込み上げるその香りを。

「どうして此処に？アパレル担当じゃないわよね」
「柚希に此処まで会いに来たって言ったら、どうすんの？」
「バカじゃない？目の前の博多湾に飛び込んで来たら？」
「貿易の妨げになってでも？」
「自分のところの通関士と海運業者でも使って、入港許可でも何でも頼めば？」

「柚希と一緒なら、それもやる価値あるな」
「道連れになるならブタと結婚する方がマシよ」

軽口を叩く男に昔から苛つき、それを悟られないようにと鼻で笑って返すことが常だった。やっぱり今も変わらなくて、さらに昔がすぐ後ろに控えている気分に陥るから。“本気なのに”と聞こえた言葉に、少しだけ強まったての握り加減にしてもすべてを知らない振りで通すのがベストだ。

すると、コンコンと後方でドアをノックする音が聞こえ、慌てて握られていた手を勢い任せに解いた。制服を着た若い女性社員が一礼をして、お茶をテーブルへ２つ置いて静かに去った。けれど、この男の“ありがとう”と言った時の微笑に、またしても被害者が一名増えたと感じた。可愛らしいＯＬの子のこの男を見つめる目が、明らかにぽーっと蕩けるような眼差しだったから。…まあ、ご愁傷様ね。

「妬けた？」

「アホらし…、もう冗談は良いわ。ご用件は何でしょう？」

ひとつ溜め息を落とすと、一人掛けの革張りソファに身を沈める。たとえビジネスの場とはいえこの男しかいないし、と足を組んでしまうのも昔馴染みのせい。

「ホントに仕事じゃないって、…まあ私的な仕事があってコッチに居たけど」

「で、何よ？」

「ああ」

くすくすと笑う姿が綺麗に映るのは、大手商社の息子という風船男の育ちの良さゆえ。彼が座っていた席へ再び腰を下ろすと対峙することになった。改めてその真っ直ぐな目をこちらへ向けられれば、何とも言えない感情が入り混じるとは情けないと思う。

「――結婚することにした」

ただ一言、はっきり聞こえたその声色が真剣なモノだと分かってしまうから。…これだから昔馴染みプラス・アルファの関係はデメリットだらけなのよ。

小さく手が震えているのは、思わぬ地で思いもよらぬ対峙をする羽目になったせいだと言い聞かせていたのに。

今も蝕むかのフレーズがリフレインしているから、得意の冷たい言

葉も紡げない自身の経験値がひどく滑稽に感じてしまった…。

『結婚』なんてご勘弁。（後書き）

ご覧下さいましてありがとうございます。
そしてコチラではお久しぶりとなります。

本編はＨＰにて公開中（ＨＰでは“☆さりさり☆”名義）の『この涙を拭うのは、貴方でイイ。』のサイドストーリーとなります。
また祐史の方は『社長室シリーズ』でも登場し、かなりの重要人物でございます。
さらに『ＣＬＡＰ』にて、本編の２人の小話をお礼としてＵＰしてございます。

ご興味を抱かれましたら、よろしければ覗いてみて下さいませ。

なおコチラのお話ですが…ただ今、別サイトの大賞に３作応募中（詳細はＨＰにて）のため、そちらのお話の完結に力を注いでいる最中でございます。

余裕が取れるようになりましたら、また今後の２人を紡ぎたいと考えております。
その際はどうぞよろしくお願いいたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8879z/

ためらうよりも、早く。

2011年12月27日23時53分発行